



138

## 組織は進歩するか

㈱中小企業総合研究所 主席研究員 坂東輝夫

**中**小企業にとって、組織化がいかに重要であるかは、いまさら言うまでもないことだろう。とりわけ、本誌の読者に多い組合関係者は日々、組織化の値打ちを実感しておられることだろう。

もっとも、最近では組織化というよりは、「産業連携」という方が通りがいらしい。しかし、組織化と言ひ、産業連携と言っても、その目指すところは単独で力の劣る中小企業同士が手を結んで（組織を結成して）規模の利益を追求する点では同じである。組合がその最もポピュラーな形態であることは言うまでもないが、同時に組合以外の連携組織も広がっている。

さて、その産業連携だが、中小企業が守りを固める際はもちろん、攻める際にも有効であることは良く知られている。最近では、中小企業に吹く風が厳しいせいも、守りを固めるために組織化の力に頼る中小企業が多いが、それも当然だろう。

ただ言うまでもないことだが、中小企業はただ環境の厳しさに一方的に押しまわられているだけではない。厳しい環境をモノともせず、前向きに攻めていこう

とする中小企業も多い。いつの時代も、これら前向きの中小企業が時代を切り拓いてきたのである。

**で**は、前向きの中小企業はどのような手段で時代の閉塞を打ち破ろうとしているのか。ここでも、組織化あるいは産業連携という手を採用している企業が多いのである。中小企業は厳しい環境から自らを守るために手を組むだけでなく、時代に挑戦するためにも産業連携という手段を活用しているのである。

いくつか、事例を見よう。東京・大田区の中小企業4社は、東京工業大学や大田区を含めた企業連合（コンソーシアム）を結成し、特殊な炭素繊維を共同開発する事業をスタートさせた。東工大からは同大学のTLO（技術移転機関）である理工学振興会、大田区からは産業振興協会が参加している。

この産学官の連携組織で、東工大教官が持つ技術を実用化しようとしているのである。硬度が高く、摩擦係数が低い膜を実用化するもので、完成すると広い利用が期待されている。この事業は、経済産業省の今年度の新産業創出支援事業に

採択されている。

**次**いで、東京・多摩地区の中小企業5社は微小な機械の一体成型技術を開発する産学官連携プロジェクトに取り組んでいる。医療機器向けの超小型ポンプなどの量産技術を3年以内に確立するというもので、東京都立大学や技術移転機関のタマティーエルオー（八王子市）それに経産省所管の産業技術総合研究所も参加している。

同プロジェクトが狙う技術は、マイクロ・エレクトロ・メカニカル・システムと言われる次世代技術の分野に属している。機械加工のなかでも特に成長力の高い分野だとされており、その難しいテーマを中小企業が主導して行おうというのだから、理想は高い。中小企業総合事業団の戦略的基盤技術力強化事業の対象に選定されており、同事業団から研究開発費が助成されている。

このコラムの6月15日号（1543号）で紹介した事例に、東京・大田区の中小企業ら30社が集まって、水上飛行機を開発しようというプロジェクトがある。このプロジェクトにも、やはり東大の教官や航空宇宙技術研究所などが協力しているが、とうとう9月下旬に飛行艇の模型を完成させた。

この模型は、3年後をメドに製造する予定の実物に比べ3分の1の大きさというが、モーターを搭載すればラジオコントロールで15分間の飛行が可能という。ここでも、産学官の共同歩調で着々と連携組織の実績が積み重なりつつある。

以上、いくつか事例を見てきたが、それと言えることは中小企業が時代の閉塞を打ち破ろうと前向きに挑戦しようとする場合も、組織化あるいは産業連携という手段が大切なことがよくわかる。守りだけでなく、攻めるにも連携組織は有効なのである。

**た**だ、上の事例に明らかなように、連携組織と言っても、単に中小企業が手を組んでいるだけにとどまらない新しさがあると思わないか。中小企業が中心になって主導権を握っているのは確かだが、その連携の輪の中には中小企業以外の団体も顔を出している。大学であり、官立の研究所である。あるいはズバリ、お役所そのものである。

このように、企業連携にとどまらず、産学官の連携にまで広がっているのが、最近の連携の特徴なのである。従来の組合とは明らかに異なる面がある。組合と異なると言えば、中小企業が連携して取り組もうとするテーマも、中小企業らしからぬ先端性があると思わないか。

大企業でさえ取り組むのをためらうようなテーマを、中小企業が堂々と取り組んでいる。こうした動きを見て、連携組織も進化しつつあると言えないか。実際、産業連携も日々、進歩しているのである。組合が連携組織のポピュラーな形態であることは事実だが、組合の活動も工夫一つでまだまだ活発化するのではないか。組織化に新しい血を盛り込みたいものだ。